



KEN

桜建会報

80周年記念特別号

私の学生時代

— 激動する社会と共に —

工学部建築学科

上／オープンキャンパスで無響室の説明を受ける高校生
下／福島県岩瀬村の里山整備計画に参加してつくったツリーハウス



理工学部建築学科

上／2001年製作されたエアドーム「習志野ドーム」。
地震時の避難シェルターとして、東京建築展にも出品
下／2003年に竣工予定の駿河台下の1号館



創立80周年記念

私の学生時代

激動する社会と共に

80周年を迎えて

桜門建築会は、今年創立80周年という慶節を迎えました。会員のひとりとして喜びにたえません。この間の本学建築系学部学科卒業生の数は、6万数千名に達しています。当然のことながら、これらの方々の建築界での活躍は目覚ましく、広く社会に貢献しておられます。そして少なからず学生に大きな影響を与えていることと思います。

私はこの80周年を契機に、日本大学がさらなる発展をするためには、桜門建築会の活性化がなによりも必要であると思います。そのためには会員相互の絆を深め、さらに協力し、結束しなければなりません。そしてこの結束力が一層の活性化を促し、見えない力となって大学を、学生を後押しするようになればと願っております。

一方、大学の評価には、学生の質と先生の業績があげられます。これらが真の評価なのか、異論も多いと思いますが、もっともわかりやすい基準でもあります。前者は偏差値とか、国家試験に何人合格したかがひとつの目安になり、後者は論文の数とか、国の研究費をどのくらい獲得したかが対象となります。大学に所属する教員各位におかれましては、教育・研究の成果を通じて対社会的評価を高める努力が、ますます必要とされます。

80年の節目を機会に改めて先人の遺徳に思いを馳せ、歴史の重みをこの結束力に集中し、わが国建築界をリードする大学を目指したいものです。英国の首相、故ウィンストン・チャーチルは、あるインタビューに答えて「もし、もう一度生を得ることがあれば、英国に生まれ、母校に学び、妻と結婚したい」といっております。このような母校こそ理想であります。

このたび80周年記念号として、各世代の方々に学生時代をどのように過ごされてきたのか、貴重な原稿をお寄せいただきました。お礼を申し上げますとともに、これを機会に会員が改めて次の世代を思い、学生に刺激を与えるような会を目指したいと考えております。

日本大学桜門建築会会長 平山善吉



学籍を離れたら 即徴兵の学生時代

堤重雄
専門部工科 1939年卒業

1936年2月26日、在京軍隊の青年将校が部下1400人を指揮して首相官邸、陸軍官邸、警視庁等を急襲して大蔵大臣、内大臣、教育総監等を殺害、侍従長に重傷を負わせた。二・二六事件である。東京には戒厳令が公布されほどなく鎮圧、首謀者の処刑で幕となった。この年が私の日大入学の年である。

これより先、1931年満州柳条溝における満鉄線爆破事件（関東軍の一部幹部が仕組んだ謀略行動である）に端を発し、既得権の確保と日本人の生命財産の保護を名目として駐屯中の独立守備隊を出動し、またたく間に奉天、長春、チチハル等主要都市を攻略して戦果を拡大、ついに満州全域を制覇するや1932年東洋平和と五族協和を国是とする満州国を樹立した。一方上海では上海事変が起こり軍隊を進攻。ドイツではヒトラーのナチスが勢力をつけ欧州の脅威となってきた。日本は満州進出を避難する国際連盟を脱退し、世界の舞台

で大見栄をきったところは格好よくしびれたが、孤立のツケは早速やってきた。日本の外交は下手だった。軍部におされて内政も駄目、経済は不振、物資は不足、農村は疲弊、人身売買で生活を支える貧困、国防婦人会、防空演習、と戦争の登音が次第に大きくなってきた。

学籍を離れたら即徴兵である。兵隊に行ったらいつ帰れるか、生死さえわからない。東京で思いきり遊びたい、反面私のために苦しい仕送りをしてくれる姉兄のことも考えねばならない。複雑な心境であった。

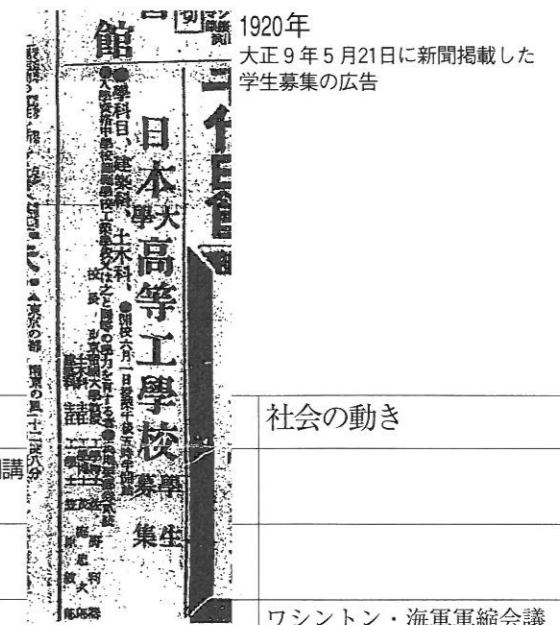
四国の山の中で育った私には、建築に関する知識などまったくなかった。ただ一生の仕事としてこの地球上に私の手がけたものを形として残したいという思いはあった。

講義は珍しくて魅力があった。学年が進むにつれて先生方の偉大さがよくわかってきた。教え子としての責任が感じられた。工学部長佐野利器先生を頂上に、建築大意（伊部貞吉）、構造力学（船越義房、小野薫）、建築構造（長倉謙介）、建築様式（大岡美）、地震（河角）、材料（森徹）、錚々たる教授陣である。船越師はコツコツとノートを取る方式で最初は戸惑った。建築用英語を教わり建築家らしい気分になった。小野師にはトラスとラーメンの講義を受けた。短い時間であったが要領がよく理

解できた。長倉師の構造と製図ではオサマリについて、また製図の提出期限が厳しかった。成績の悪いものは卒業させない主義で怖かったが、よく話す心の暖かい先生だった。

建築とは直接関係はなかったが学校教練は大きなウエイトを占めていた。「教練を日常生活に具体化せよ」というある宮様のおことばで服装、言語、態度等、中でも頭髪の丸刈り強制は夢多き青年学徒を苦しめた。演習場は代々木練兵場、お茶の水から原宿間は10銭、演習後の佐野屋のおしるこのうまかったこと。年1度の富士山麓、駒門、滝ヶ原などの敵舎での宿泊演習も思い出として残る。

当時の学生には今のようなアルバイトはなかった。故郷からの仕送りの中でつましく、あるいは豪勢にやっていた。つまし組の私は剣道部に席をおいた。部長は小野先生で対外試合の帰りに新宿の末広亭や亀井鮎につれて行ってくれた。そしていろんなことを教わった。夏休中の合宿は駿河台下の明治館という旅館で、きれいな娘さんにみんな競ってモーションをかけたが成果はなかった。しかしその旅館の斜め前に小山とし子という女優のニューフェイスが出現。しとやかな可愛い日本娘でみんなの目が輝いた。折あらばと意気込んだが、だれひとり話もできなかった。つま



年代	日本大学・学部・学科の動き	社会の動き
1920 (大正9)	日本大学高等工学校(土木、建築)設置、三崎町に開講(理工学部の基盤となる)、校長に佐野利器就任	
1921 (大正10)	駿河台に日本大学高等工学校の新校舎建設	
1922 (大正11)	日本大学高等工学校第1回卒業	ワシントン・海軍軍縮会議
1923 (大正12)		関東大震災
1924 (大正13)	日本大学工学校設置	

しい学生の淡い青春のひとつまでであった。

1937年、廬溝橋事件が発端となり、北支事変、支那事変、日中戦争へと拡大していった。翌年には国家総動員法が公布され戦時態勢へとつき進んだ。

私もいよいよ卒業期。代用品、慰問袋、千人針、灯火管制、徴兵検査が待っている社会へ巣立っていった。

人間的なつながりが濃い時代

中里英二
旧工学部建築学科 1949年卒業

私たち18回生が入学したのは昭和21年です。もう57年前のことになります。当時は終戦後の混乱期で予科の学生は前年9月卒業なので、57人のクラス中18人は陸軍士官学校・航空士官学校から、13人が専門部、10人が予科から、7人は海軍兵学校・機関学校から、2人が横浜高専からといった変わった編成でした。当時は報復を恐れた占領軍から文部省に対して「軍学徒はクラスの10%以下にせよ」と通達があったが、日大ではそんな通達を無視して入れてくれた。したがって年長者も多

く、後に小田急建設の副社長になった工兵少佐の松沢さんや、フジタ工業の常務になった砲兵大尉の金子さんもおられた。

入校早々に上級生から授業料値上げ反対集会に参加しろといわれ講堂に集まったが、皆さん元気の良いのに驚いた。当時は物資不足の時代で学生は軍服、満州から引揚げられた齋藤謙次先生は国民服など着ておられたが、小野薫先生の背割りのダンディーな背広は目立っていた。寒い冬の日に出席の学生が10人ほどだったが小野さんは、寒いから俺の部屋へこいよと教室で講義をしていた。皆食料の買い出しに忙しく休講も多かったが、吉田鉄郎先生の講義は丁寧だった。助手の佐藤孝義さんの指示で先生が設計中の某店の詳細図を描かせてもらったりした。

3年生の頃、前川国雄先生の講義では、先生が設計された日本橋の銀行の現場を見学した後、原寸図や配筋図、工事費内訳書など見せていただいたのが印象に残った。当時は戦後復興の黎明時代で本格的なRC建築はほとんどなく、建築界は文筆活動が主だったように記憶しているが、高山英華さんの国土会、小坂秀雄さんの日本建築文化連盟、池辺陽さんたちの新日本建築家集団(NAU)などが醸立した。われわれもNAUの学生会に入って東大

や早稲田の学生たちと討論したが、山口文象さんは熱心に指導してくれた。また雑誌も新建築が薬半紙B5版30頁ほどで復刊した程度だったが、その木造住宅の競技設計に応募して佳作に入ったりした。後に有名になった菊竹清訓さんは早稲田の学生で、入選の常連であった。

そんな学外活動で先輩のお宅に押しかけることも多く、大成設計部の伊藤喜三郎さんや坂倉設計の富田陽一郎さんには親切にご指導いただいた。あの頃は先生や先輩と人間的なつながりが濃くて良い時代だったと感謝している。

なにしろ生活が不自由な時代でアルバイトにも精をだした。九段にあった学徒援護会の幹旋で大手町のオフィスの気積調査をやり、OLとデートを楽しんだこともあったし、青柳さんに紹介された朝霧の米軍キャンプの実測図作成のアルバイトの対象は昔の予科士官学校の生徒舎だった。1年間住んで勝手知った建物だし、手早く仕上げて提出したら、担当の米軍少佐から褒められてどこの大学だと聞くから、知らん顔をして日本大学だと答えたこともあった。

忙しい割りにはよく遊んだ。ニコライ堂の見える製図室の机を片づけて、御茶の水文化

学院の娘さんたちとダンスをしたこともあったが、厳つい顔の構造の江崎先生が上手に踊るので驚いた。後で先生はアメリカの大学を卒業したと聞いて合点した。

昭和24年に卒業したが、当時は大手の建設会社は海外からの引揚げ社員の収容で各社共新規採用は少なく苦勞した。やっと大成に内定してホッとしていたところ、通信省営繕部に内定していた同級生の坪井善正さんが現役将校追放令に引掛かって役所に入れなくなった。偶然戦前の高等文官試験に代わる人事院の公務員試験に受かったので、教室やご本人から代わってくれと頼まれ、気にそまぬが役人になった。この時の人事院試験は第1回だったが全国53人中で日大は4人受かった。通信省営繕部はすぐ郵政省建築部になり、設計課長は小坂秀雄さんから山本宗夫先輩が係長でおり、お世話になった。昭和28年頃羽田郵便局の現場監督官をやった時に、現場所長が藤田組の金子さんで大変良い仕事をやってくれて、この年の建築学会賞をいただいた。その後山本さんのご推薦で母校の非常勤講師を昭和35年から51年まで勤めて、諸先輩や先生方にご厚誼をいただいた。25年卒の榎並さんは士官学校の同期生だし、小谷さんや近江さんとは飲んだり歌ったりした。

私は郵政省に14年間勤めた後、小坂部長が退官して丸の内建築事務所を開くのに参加して退官し27年勤めたが、その間優秀な教え子が入社して助けてくれた。現社長の山際進さんはそのひとりで立派に活躍して頼もしく思っている。前記の先生や先輩の方々も亡くなられたが、長かった建築設計の生活を顧みてヒューマンな母校の人びとを懐かしく思い出して、感謝しています。

図書室に本はなく、あるのは優秀な教授陣の頭脳だけ

梶川和男
旧工学部建築学科 1949年卒業

昭和21年入校した頃は、敗戦の傷跡も生々しく、復興のかけ声は勇ましいが、激しいインフレ、乏しい食糧に遅々として進まずというあり様であった。よくも残ったという工学部1号館や4号館、木造2階建の日進講堂などが、われらのキャンパスであった。製図室に製図板はなく、図書室に本がない。あるのは優秀な教授陣の頭脳だけという状況であった。本がなければ、神保町界隈の古本屋街を軒

並み歩き回ってめばしい本を探す。町中の工事現場に侵入し(現在はまず不可能)、勝手気ままに歩き回る。生きた教材である。日比谷にあった米軍CIE図書館に出かける。アーキテクチュラルフォーラム誌など、当時の日本の建築雑誌にはなかったアート紙、カラー頁の豪華本があったが、トレベをもっていつてはトレースしたりした。日進講堂の一室を占拠して、先輩後輩共々一体となって公開設計コンペに応募するなど、設計することの楽しさ、苦しさを味わった。

インフレに対処するアルバイトも建築に関連ある仕事に限定し、某工務店の学校の木造矩計製作作業とか、新宿歌舞伎町周辺の平板測量(陸士時代に実習していた)を手伝ったり、代願事務所での設計作業や申請業務書類の作成とか、何でも経験したことが、後年やればできるという自信につながったことは大きい。今日のように多様な娯楽も少なかったが、社交ダンスが流行りだし、多少浮ついた気分、日進講堂を利用してダンスパーティーをしたこともある。息抜きも多少はしていたようである。

小野薫教授は「これからデザインを専攻する者でも、構造理論はもちろん、設計もできなくては新しいデザインを生み出すことはで



1928年
2001年に解体した理工学部1号館は昭和3年に竣工(『1958年卒業アルバム』より)



1930年代
昭和7年以前のお茶の水駅(『桜門建築会70年のあゆみ』より)



1933年
昭和8年の駿河台下の交差点(『桜門建築会70年のあゆみ』より)



1935年
昭和10年初代学長佐野利器博士を囲む懇親会(『桜門建築会70年のあゆみ』より)

1925 (大正14)		
1926 (昭和1)		
1927 (昭和2)		金融恐慌
1928 (昭和3)	◎日本大学工学部(土木、建築、機械、電気)設置(現在の理工学部)に発展、同予科開設。工学部本館(現理工学部1号館竣工)	奉天張作霖爆殺事件
1929 (昭和4)	○専門部工科(土木、建築、機械、電気)設置(現在の工学部に発展)、科長に佐野利器就任。日本大学工業学校設置、校長に笠原敏郎就任	世界恐慌始まる
1930 (昭和5)	日本大学工学校を駿河台に移転	昭和大恐慌、エログロナンセンス時代

理工は◎、工は○、短大は□、生産は■、海洋は△のマークを付しました

1931 (昭和6)	〈昭和6年以前より初期桜門建築会活動〉	満州事変
1932 (昭和7)		満州国建国、五・一五事件
1933 (昭和8)		三国同盟より脱退
1934 (昭和9)	高等工学校を3年制に改制	
1935 (昭和10)		
1936 (昭和11)		二・二六事件、日独防共協定、日中戦争
1937 (昭和12)		

きない」と絶えずいわれた。私はアーキテクトプロフェッサー吉田鉄郎教授の建築論に強烈にひかれ、設計で身を立てる決意で、卒業制作に励んだ。昭和24年春より教授になられるという浜口隆一教授のご指導を受けた。当時はコルビュジエ一辺倒で、作品もそういう傾向で「ヘルスセンター」を設計した。現在喧伝されている浴室がたくさんあって、一日楽しく遊べるというような施設ではなく、治療する医学に加えて予防する医学という、これからの病院の構想である。A1版のケント紙20数枚にわたる力作と自画自賛している。ちなみに、浜口先生の卒業設計の作品を拝見させていただいたが、それは見事な中味の濃い作品であった。きれいにインキングされた製図の見事さは芸術的作品であって、一歩でも近づくように考えて制作したが、果たしていかがであったろうか。ただし、私の作品は現在どうなっているか、わからないのが残念である。

現存する古典建築の作品を見ると、熟練した職人たちの汗の結晶がにじみでている。そういう仕事をした職人たちは、どんな生活を送っていたのだろうか。どういう親方の下で、何年修業して一人前になったのか。どんな組織で仕事をするのか、他の職人との連携は。今日いうところの世界遺産になるような建築を

造る秘訣はなにか。こんな考えから「座の研究」というテーマで卒業論文をまとめた。当時の建築史は、作品の沿革の歴史であって、職人の側からみた建築史ではなかった。建築を経済的側面からみる建築史は、皆無ではなくても、ほとんど顧みられなかった。戦前の歴史の流れからは止むを得ないことであったが、権力の象徴としての建築には、当然社会的経済波及効果があるのが建築行為とされた。建築を生活活動という切り口でみることにより、建築の成立から社会的使命が終わるまでの経緯が解明するものである。当然西欧社会の「ギルド」との相違についても言及した。ご指導をいただいたのは小林文次教授で、浜口教授のご紹介であった。浜口教授と同じく、昭和24年春の着任以前のことで、ゼミ第1号といえよう。

建築は総合的技術の集積である。現場をあずかる技術者は、多くの職種の技術について精通してはならない。しかし現在あまりにも専門化され、その多くに精通することは不可能に近い。そこでその専門職の人のこととの交流を通して、十分意志の疎通をはかり、大局的判断を誤らないようにすることが大切であろう。

アーキテクチュアとは大きい技術であり、

大いに工夫する「大工」技術であることを、学生時代から把握する勉強をしてもらいたいと考える。

昭和21年、工学部建築学科の頃

神波謹之助
旧工学部建築学科 1949年卒業

昭和21年4月、旧制の工学部建築学科に入学した私たちは3年制でしたから24年の3月に卒業しました。以来53年の歳月が流れ、同級生の中で最年少の私も77才となりました。

この年度の工学部には予科からの入学者はいないので、クラスの構成は、専門部工科を昭和20年9月に繰上げ卒業した私たち十数人と、学外の高等工業等からきた数人の他は、軍隊の学校、いわゆる陸士や海兵等の出身者が二十数人と圧倒的に大勢で、中には終戦当時現役の将校だった人や、年令も10歳くらい年上の人がいったりして、人生経験も多種多様、バラエティに富んだクラスでした。

戦争から解放され、終戦の混乱が少しずつ平常に戻りだした時代でしたから「これから

は、勤労動員などに狩り出されないで通学できる」という、希望をもつての楽しい通学の毎日でした。ただ、前年よりのインフレーションと食糧不足で、生活そのものは大変でした。設計製図の課題に使うケント紙などもなかなか入手できず、ずいぶん苦労しましたし、価格も日を追ってだんだん高くなって、その頃再開し始めた建築設計事務所の手伝いなど、アルバイトも結構やりました。

駿河台下の都電通り（靖国通り）には闇市の露店商が、軒ならぬ道路にシートを敷き並べ、小川町から須田町辺りまで並んでおりました。

3年過ぎていよいよ卒業という年には、ドッジラインの発表があり、シャウプ勧告などいろいろと世相が変わって、就職もだんだん難しい時代になってきましたが、なんとか各人社会へでていきました。

以来半世紀が過ぎて、いく人か仲間が逝きました。昭和が平成になった頃からクラス会も、昨年幹事役の1人が亡くなって中断しておりますが、毎年1回集まっておりますし、また今年から再開したいと思っております。同期会の名称は「桜建一八会」と申します。そして日本大学工学部在学中の頃を、懐かしく思い出しております。

今見ても斬新な講座の内容

小島秀夫
旧工学部建築学科 1949年卒業

昭和20年8月15日太平洋戦争は終結し、米国の占領下で日本の再建がはかられることになった。われわれ18回生は昭和21年5月建築科に入学を許され、晴れて日本大学の学生となった。この18回生はほとんどが、戦争の終結によって陸海空の士官、生徒が解散され、入学試験の上で大学へ入学が許された者である。予科、専門部など25名、陸軍15名、海軍10名程度。特に陸軍のひとの中には、佐官級の将校で教官の職を全うされた方を初めとし、その他指揮官の職を全うされ、実戦で生死の境を経験するなど、多士済々の構成であった。それぞれ異なる経歴のかたの混合クラス構成であったが、特別トラブルなど聞いたことはなかった。当時は誰であれ、今後の新しい人生に対して、まず第一に学校で新しい知識の習得に全力をあげることであった。

当時の教授は研究の成果を紹介するなど、今見しても斬新な内容であったことに驚かさ

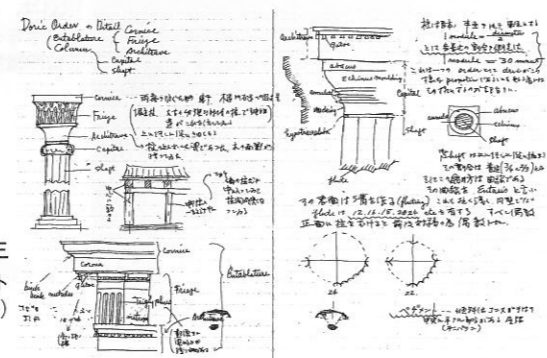
れる。以下は私が学生時代に書いたノートに残されていたものの一部である。いずれも講座の概要であって、各教授の考えをうかがうことができるものだ。

1. 建築計画／吉田鉄郎教授／Architectureの語源

Archiとは主なるで、tectureとは工芸、美術の謂である。つまり、建築は大工芸、大芸術という意味である。Greece時代にはなぜこういったか。ギリシャではTempleを建造することがもっとも重大な芸術であった。次第にその意味が広くなり、一般の建築もArchitectureの中に入り、都市計画、庭園までもその中に入った。今日、建築はいかに定義されているか。これを常識的にいえば建築は、人が住むための地盤に固定して作られたものといえる。もちろん例外を考えれば、人が住まなくても、動物の入るところでも、または人が入らない中空の記念碑凱旋門もまた建築に入る。地盤に固定せぬサナトリウムなどは日光の動きにつれて動く。また移動家屋、組立てハウスも建築に入る。それを作るためには材料労力が必要であり、その如き材料で作るためには技術的、工学的分野が必然的に起こる。しかし、一面から考えれば、人が入って住むためには人の感情生活に満足を与えるものでなけ



1946年
昭和21年4月の入学式で。
軍服姿が目につく
(写真提供：金子英夫)



1946～49年
建築史講義ノート
(資料提供：小嶋秀夫)



1946～49年
建築展 (写真提供：金子英夫)



1946～49年
坪井教授の鋼骨構造学の授業
(写真提供：金子英夫)

1938 (昭和13)	工学研究所設置(理工学研究所の前身)	国家総動員法
1939 (昭和14)		ノモンハン事件
1940 (昭和15)		
1941 (昭和16)		真珠湾攻撃
1942 (昭和17)		ミッドウエー海戦で日本艦隊大敗、米軍ガダルカナル島上陸
1943 (昭和18)		出陣学徒壮行大会

1944 (昭和19)		神風特攻隊で400人の若き命露と消える
1945 (昭和20)		東京大空襲(死者12万人)、広島(死者14万人)・長崎(死者7万人)原爆投下、ミズーリ艦上で降伏文書調印
1946 (昭和21)		日本国憲法公布、天皇人間宣言
1947 (昭和22)	○専門部工科を郡山市に移転(現工学部)	日本国憲法施行、片山内閣成立
1948 (昭和23)		極東国際軍事裁判判決

ればならぬ。またそれのみでなく、見る人にもある印象を与えるからには、芸術的なものでなければならぬことは当然である。そのように、建築は工学的存在たると共に、芸術的存在である。たとえ堅牢に作られ衛生的に満足でも、見て感じが悪ければ本当の建築でない。このように建築は工学と芸術の総合とも考えられる、一種の技術的芸術とも考えられる。

2. 建築力学/小野薫教授/緒論

応用力学とは一般力学を工学上の諸問題、諸現象に応用することより生ずる学問の総称である。材料力学、構造力学、流体力学、水力学、空気力学などである。材料力学とはある材料の構造物に外から力が加わるとき、中にどのような力を受け、いかに変形するかを研究する学問である。以下若干簡単に用いられる熟語の説明をする。

- ①構造物とは 棒、版、平板、曲板、塊の三者の組合わせの構造物。例は橋梁、船舶、航空機など。
- ②物理学上 $F=mx$ (ダイン)。質量に加速度を生じせしめる原因となるもの。
- ③物体力 構造物自体の重量が関係する力。表面力は物体の表面に働く力と荷重と反力に分けられる。

3. 斎藤謙次教授/不規則な剛節ラーメンに

対する組織的解法

不規則型剛節ラーメンに対して、適合条件の導入法の困難な理由のために撓角法はあまり利用されず、その実用化の問題もひとり特殊ラーメンを除いては今日まで忘れられた状態であった。本法は柱状表の機械的作表法と聯立方程式の機械的作表法との2段の仕事に分かれ、矩形ラーメンの作表法より多少複雑な欠点は免れないとしても、本法の基本概念は極めて簡明にして、方程式番号及び未知数番号の表す意味を理解し得るならば、それを指針として性状表にしたがって、機械的作表により解決できるのである。さらに、この機械的作表法のアイデアおよび撓角法理論の内容から必然的に求められる不規則形剛節ラーメンの固定モーメント法も応用する組織的解法を提案したのである。従来、固定モーメントによる不規則型の剛節ラーメンの解法として特殊ラーメンのみ独特の手法によって解決したものであるが、本法はいかなるラーメンに対しても同一の方法によって機械的に解決できるところに特徴がある。

入校が昭和21年で、東京は未だ焦土と化し、いかに明日の宿と糧を得るかが大問題であった。ただ有難いことには、復興のために人手が不足して、われわれ学生、特に建築の学生

は需要が多かったと思われる。学生の側でも実習のつもりで、大いに協力した。一方雇う側にも学生が授業に出席できるよう配慮してもらった。学生生活も大らかなところがあった。建築の製図室でダンスの講習会が開かれた。先生側もやむを得ず不問とした。年に1度の学園祭には、校内を開放してダンスパーティが恒例とされた。戦後の厳しい生活の中で、皆元氣いっぱい学生生活を楽しんだと思われる。

当時のアルバイトで旧海兵団跡地を米軍が基地として使用しており、その賃貸借料算定のため土地、兵舎、逗子の別荘の測量、製図を宿舍食事つきで実施した。これほど優雅な仕事はない。楽しんで勉強させてもらった。旧日大工学部は鉄筋コンクリート、耐火構造であり、空襲の被害は致命的でなかった。登校するとき厳然と建つ学び舎でよき青春時代を過ごせたことに感謝したい。

手づくり受像器で、テレビの試験放送を初めて見る

本岡順二郎
新工学部建築学科1部
1952年卒業



1949年
下高井戸にあった理工学部世田谷校舎の前庭 (写真提供: 西村俊雄)



1950年
志賀高原の日大工部の指定旅館 (写真提供: 山崎栄)



1951年
関西研修旅行。醍醐寺の前で (資料提供: 菅沼邦彦)



1952年
鶴沼海岸の松林には工科海の家があり、夏のゼミが行われた (写真提供: 西村俊雄)



1954年
製図室にて。工学祭になると、白石膏で床が真っ白になり、歩くたびに飛び散った (写真提供: 山崎栄)

1949 (昭和24)	◎学制改正により、新制大学に改変設置移行 ◎工学部第一部(昼間部): 土木、建築、機械、電気、工業化学を設置 ◎工学部第二部(夜間部): 土木、建築、機械、電気、工業化学を設置 ◎郡山の専門部工科は第二工学部になる	単一為替レート(1ドル=360円)
1950 (昭和25)	□短期大学を創設(現短期大学部)。第一部は駿河台校舎、第二部は両国校舎で開講	朝鮮戦争勃発
1951 (昭和26)	日本大学高等工学校を閉校 ◎新学制による工学部大学院工学研究科に建設工学を設置	サンフランシスコ平和条約締結

1952 (昭和27)	□日本大学短期大学を日本大学短期大学部と名称変更 ■工学部に工業経営学科を増設(生産工学部の基礎となる)	血のメーデー事件
1953 (昭和28)	◎工学部に大学院工学研究科博士課程に建設工学を設置	朝鮮休戦協定
1954 (昭和29)	□短期大学部工科第一部、1年次を津田沼校舎に移転	防衛庁・陸海空自衛隊発足
1955 (昭和30)		自由民主党結成(保守合同)

けたい！」と考えるようになる。何を専攻するか迷ったが、人間の生活の根本は「衣食住にあり」という誠に単純な思考から、建築を勉強しておけば食うには困らないであろうと

考え、駿河台の日大高等学校（夜学）の建築科を受験し、入学することができた。さて1948年に、建築教室の江崎伸市先生のところで「電話番号を探しているが、お前どうか」という話がきた。早速、3号館3階の南面した江崎先生の部屋を訪ね、面接していただいた。その日のうちに「都合の良い日から出勤しなさい」と言われる。これがちょうど50年間続いた日本大学勤務のはじまりであった。

年が明けて、49年4月から高工1年の学生は新制大学2部1年に移行できることになり、希望者は簡単な試験を受けて移行した。そうしなかった人はそのまま高工を続けて卒業した。

こうして、日本における高等教育の大改革の初年度から夜間部の学生になった。1年生のときは一般教育として、土木、建築、機械、電気、工化、すべての学科の学生がほぼ均等に集まり1学級が構成された。この制度は数年のうちに、消滅してしまっただが、今考えてみても目的や興味の違う若者と一緒に勉強できたのは、よかったような気がする。

私が部屋番をしたところは、松井嘉孝先生

の部屋であった。常時、旧制学部3年の卒業研究の学生がやってきて、江崎先生の指導による接着剤の合成実験を行ったり、資料を整理したり、雑談をしたり、それは活気のある部屋であった。学生の多くは、陸軍士官学校出身とか航空隊にいたとか、海軍にいたという人が多かった。何やらアルバイトをしていた者もいたが、真面目に勉強していたように思われた。

私は特に定められた仕事もなく楽しく勉強できたが、年末の試験のときには真冬でも暖房はなし。しんしんと冷える夜中の2時3時頃まで試験勉強をしたものであった。ある朝、7時頃に外へ出るとあたり一面白銀の世界となっていた。ニコライ堂東側の石垣（今は金網が張ってある）にへばりつくようにあった2階建の菓子屋へ行き、ふたつ割したコッペパンにリンゴジャムを薄くつけてもらい、牛乳を1本買って朝食としたのを昨日のこのように覚えている。それでも「ボロはまあとえど、心は錦」のたとえで、「みすばらしい」とか「つらい」とか思ったことはなかった。これは1949～51年頃の食べるものさえ不足した日本社会では当たり前のことであった。

2年生になると構造力学第1は江崎伸市先生が担当され、夏休みには静定ラーメンの反

力、曲げモーメント図、せん断力図を100題以上も解いた。3年生の構造力学第2は斎藤謙次先生の担当であったが、はじめ2～3回授業を受けたが、その後は助手の先生が代行された。斎藤先生からは大学院のとき、不静定ラーメンの解法の授業を受けた。黄土色の表紙の学位論文と思われる本を、ところどころミスプリントを直したりしながら講義を聞いた。それにしても先生は旧制学部の卒業論文として、この解法を着想されたといわれたが、大変な先生であったと思う。このほか、坪井善勝先生から「鉄筋コンクリート構造」を、加藤渉先生から「応用弾性学」の講義を受けた。

計画系としては、笠原敏郎先生から建築法規を、市川清志先生から都市計画を勉強した。伊藤喜三郎先生は非常勤であったが、1年生の製図の最初に「フンドシひとつで掛かってこい！」とはっぱを掛けられた。小林文次先生から建築史の講義を受けたが、当時先生は後に学会賞を受けた「メソポタミヤの建築」に打ち込んでおり、外国の大学の客員教授として出掛けることが多く、そのため休講が多かった。4～5人の学生と共に先生のところへ行き「休講をなくしてください」と申し出たところ、先生は横を向いて「君、本郷では講義なんかそんなにないよ」といわれ哑然とした

が、「勉強は自分でするもの」と実感した。今日のようにシラバス（講義要目）でがっちり縛られ、学生の多くは「教師の講義に頼る」というより「聞き流している」という風潮があり、これは本質的に考えてみる必要がある。

さて、コンクリートの勉強をはじめたきっかけは、松井嘉孝先生が、51年頃からコンクリートの実験をはじめられ、それを手伝ううちにだんだん面白くなったものである。

53年3月学部を卒業したが「もう少しやってみないか」という話があり、そのまま1年間研究室に置いていただき、翌年4月から大学院の修士課程へ進むことになった。幸にも月給をいただきながら大学院で勉強させていただいた。

大学院修士の学位論文は「コンクリートの降伏点に関する研究」であった。アムスラー試験機により、1万回まで手動で繰返し荷重を載荷した。夜も眠らずこれは大変な作業であったが、学部の学生が交替で作業してくれた。供試体作成のため、湿った砂を4号館前の道路に、それから中庭一面に干した。乾いたら2人1組で勢いよくふるいでふるった。砂ほりこりがもうもうと立昇り、多くの先生方に迷惑をかけたが、どの先生も辛抱されて、苦情はなかった。

学部3年の一学期が終わって夏休みに入ったとき、体調を崩し、レントゲン検査の結果結核の初期と診断され、田舎の病院に入院した。3年後期の授業はほとんど受けなかったが4年で卒業できた。休職中も給料をいただいた。今にして思えば、日大からは計り知れないほどの恩恵を受け、たくさんの方々の有形無形のご指導やご支援を受けた。

最後に、ここに実名を書かせていただいた先生方は皆他界されている。改めて時の経過を感じる次第である。

建築ジャーナリズムへの奇しき縁

吉田義男

新工学部2部建築学科 1953年卒業



私たちは昭和28年に新制二部建築学科卒業ということで、語呂をあわせた「双葉会」という名称のクラス会を毎年欠かさず開催しております。今年のクラス会では「来年は卒業満50周年」という声が級友たちの中でささやかれ、歳月の流れの早さに出席者一同感慨にふけったことでした。

「桜建会」は80周年、先人諸氏の足跡に改めて畏敬の念を禁じ得ません。戦後、教育制度が改革され、理工系にも夜間部が設置され、働きながら学べる制度が実現しました。戦中、戦後の混乱時代で建築に対する向学心を満たすことのできなかった私は、望みをかなえる機会到来と、二部の建築学科に入学いたしました。戦後4年目の春でした。

日光が電灯に代わった旧工学部の教室は、寒々としていました。電力不足から時折の停電で休講になることもありましたが、しかし、働きながら勉強ができるという新しい環境に、私は満足でした。2年次には専門科目の履修が始まり、斯界の権威ある諸先生方の聲咳に接する機会にも恵まれ、あるいは新進気鋭の若い先生方の講義を受けることができたのは、幸いでした。

「桜建会」の会長をなさった故伊藤喜三郎先生も、ご多忙な大成建設設計部の要職にありながら後進の育成のため、私たちに実社会にでて役立つような設計製図講座を担当して下さったおひとりです。

在学1年半くらい経った頃、戦時中の企業統合の時代にも建築雑誌として一誌だけ存続を認められた『新建築』の発行元に職を得ました。戦前、戦後を通じ編集のアドバイザー



1955年
日光東照宮陽明門前。建築学科有志が現地の建物を見に行く（写真提供：逸見義男）



1955年
ニコライ堂の前で（写真提供：本杉治郎）

1956 (昭和31)		国際連合加盟
1957 (昭和32)	<ul style="list-style-type: none"> ■工学部工業経営学科を習志野市に移転（現生産工学部） □短期大学部第一部、2年次を津田沼校舎に移転 〈新生校門建築会発足、会則の施行〉 〈桜建会初代会長 斎藤謙次〉 	南極観測隊、オングル島上陸、昭和基地設営
1958 (昭和33)	◎工学部に物理学科を設置し、理工学部に名称変更	



1956年
学校近くの飲み屋さんで。斎藤謙次先生、田中尚先生、佐藤稔雄先生、小野新先生を囲む（写真提供：吹上慎一）



1957年
大学院地下実験室。荷重試験の計測器の前で（写真提供：渡邊寛）

1959 (昭和34)		
1960 (昭和35)		安保改訂・学生運動激化
1961 (昭和36)		
1962 (昭和37)		
1963 (昭和38)	◎理工学部の大学院工学研究科を理工学研究科に名称変更	

のひとりであられた先輩の田口正生氏が『新建築』の創業者に、「日大建築科の二部で学ぶ学生を採用したら」と勧められたのです。縁があり、何人か希望者の中から私が採用されました。奇しき縁というべきでしょうか、これがその後、50余年におよぶ建築ジャーナリズムの世界へ足を踏み入れる私の第一歩となりました。もし、本学で学ばなかったら、このような機会はなく、今日の私はなかったことでしょう。

戦後の混乱期の「焼け野原」の都市には、さしたる建築物も建たず、用紙も割り当て配給の時代です。当時京橋宝町の昭和通りにあったバラック建ての「新建築社」はスタッフも3〜4名の小さな出版社でした。昭和47年10月、私は二代目の社長に就任いたしました。国の復興と経済成長を支えられおかげで事業経営は順調に推移してゆきました。『新建築』誌は今年で創刊77周年の誌歴を重ねております。その姉妹誌『A+U』『J・A』誌を含めて世界の建築雑誌に並ぶものにまで成長いたしております。特に近年『J・A』はアメリカ同様ヨーロッパと、全世界に広くいき渡りました。また住宅の専門誌『住宅特集』も予想を超えた読者層を得ております。出版を通じて日本の建築界に永年貢献してきた業績を

評価され、建築学会創立100周年に第一回の文化賞をいただきました。

私たちのクラスメートの笠井芳夫、毛見虎雄の両君もそれぞれに「建築学会賞」を受賞しております。1クラスで3人も「建築学会賞」を受けた例は、他にないではありませんか。その後吉田五十八賞、そして一昨年は永年にわたり、建築図書の出版を通じてわが国の文化の進展に寄与したという評価で、文化庁長官表彰をいただいたことは、出版人として、この道一筋に生きぬいてきた私のこの上ない喜びです。

建築学を学ぶことができたおかげで、出会いに恵まれ、意義ある事業に半世紀余も携わることができ、国内外に多くの友人、知人の建築家をもつことができ、悔いない人生を送れたことに感慨無量です。

教室から教室へ 渡り鳥のような学生時代

菅沼邦彦
新工学部建築学科 1953年卒業



私たちの世代は尋常小学校で入学し、国民

学校で卒業しています。6年生の12月は、大東亜戦争が始まり、最初の報道の連戦連勝は、なにも知らないわれわれにとっては有頂天にするものでした。中学生になれば、半ズボンに訣別して、黒の詰襟服に長ズボン・肩かけかばんと相場が決まっていたが、私の入学した学校は国防色の制服制帽、肩かけかばんは背のう、登校下校のさいのゲートル着用には、ただただ吃驚するばかりでした。でも、中学生になった喜びで、いそいそと通学していたようです。

週に数時間の教練・武道(剣道・柔道)体操は苦手な授業でした。2年生になると先生も少なく、休校が多くなり、勤労奉仕をしたり、3年の8月には勤労動員に駆り出されました。勉強の嫌いな私にとっては何よりでした。灯火管制下の暗闇、毎夜空襲警報のたびに防空壕に逃げ込み、西の真っ赤になった空を見上げてこれから先どうなるのかと、漫然と考える毎日でした。

「前へ進め」とばかり、よそ見をせず真っ直ぐ前を見て行進していたものが、突如8月15日「全体止まれ」と号令をかけられ、止まりました。無為な毎日を過ごしていた私も5年卒業後、日本大学予科理科(世田谷)に入学ができました。

広い運動場、のどかな田園風景、北側の三井の牧場、春には満開の桜に囲まれた予科の2年間は、いちばん楽しかったかも知れません。今までの窮屈な毎日から解放され、自由な毎日。クラスの担任は鈴木正紀先生で、今も89歳になられるがお元気で付き合いをいただいています。予科生活も2年間で新制大学ができ、われわれは新制2年に編入になりました。しかし今度は毎日の生活が苦しくなり1年間休学し、25年に復学しました。授業・手持ち単位により、教室から教室へ渡り鳥のようなものでした。授業の合間は1号館の屋上か、教室廊下・道路端で煙草を吸うくらいで、今の5号館が、日進講堂でそこの授業が多かったようでした。

3年生の時、小林文次先生・近江栄先生に連れられ京都・奈良に建築見学に行きました。夜行の急行で10時間ほどで京都。第1日目は奈良方面に向かいます。法隆寺の金堂中門は飛鳥時代のもので、柱には膨らみがあり、柱上には特有の皿斗のついた、大斗が載せてあり、彫刻などはこの時代、硬い感じがするがだんだん軟らかくなり写実的になっていく、といった先生の説明を聞きながら回りました。また3日目の醍醐寺の勅使門などは桃山時代のもので、なにかポツリするものが感じら

れました。

修学旅行のなかったわれわれにとり楽しかったが、5日目になるとさすが疲れが始め、最後は修学院離宮の中の茶室の霞棚。庭園の橋を境に深山幽谷と手前は海岸をかたどっているとの説明を聞きました。その晩は、舞子さんの踊りで打ち上げとなり、全員無事帰校しました。

4年になると卒論で一番楽な(お許し下さい)小林陽太郎先生の「映画館の室内気候」のテーマでまとめました。

人生にプラスとなる 人びととの出会い

吹上慎一
理工学部建築学科 1957年卒業



土木技師であった父がある時、長男は土木、次男の私には建築とそんな方向づけをしてくれた。何も分からなかった私は、ものを造ることが好きだったこともあり、建築の方面に進んでみようと思った。行くならば東京の大学と決めていた。当時、建築学科のある大学は日大と早稲田しかなく、

その内容も日大は構造、早稲田は意匠といわれていた。絵の不得手な私はどうしても日大に入りたかった。

入学式の時、隣り合わせて3人並んだ。ひとりは長野、もうひとりは名古屋、私は九州からと地方出身者ということで気が合い、方言丸出して話しているうち仲良くなった。その後この仲間とは、親からの送金が遅れると互い下宿先に転がり込んで、有り金を出し合い食事のおかずを買いに行った。コッペパンだけの時や、ご飯にマヨネーズをかけて終わったこともあった。また、少し金があれば、安いウイスキーに肉なしのモヤシ炒めだった。麻雀もこの時覚えた。今でもこの仲間と会うと懐かしく当時を思い出し、話はずきずき、寂しくなることもあったが、心の支えになってくれた。

専門学部では構造研究会に入った。ある夏休みの時「研修会」と称して先輩後輩と一緒に、志賀高原の発音の寮に泊まりに行った。当時男ばかりのわれわれのグループは、研修も真面目にやったと思うが、女性グループが目についた。若者同士で話が弾んだことを覚えている。その後縁あって、その中のひとりが私の家内になっている。これも日大構造研究



1957年
グラウンドで行われた各専攻別のソフトボール大会(写真提供:森田稔)



1957年
大久保校舎正門からいちばん奥の薬草園の前で(写真提供:森田稔)



1957年
体育祭の学科対抗野球大会。会場は江東区亀戸球場(写真提供:渡邊寛)



1957年
南極越冬隊員の現平山善吉(桜門建築会会長(『南極越冬記』より))



1957〜61年
1961年卒業アルバムに載る授業風景(提供:熊谷広基)

1964(昭和39)		第18回オリンピック東京大会開催、東海道新幹線開通
1965(昭和40)	第一工学部を設置	
1966(昭和41)	○第二工学部を工学部と改称 □短期大学部第一部、1年次を習志野校舎に移転 ■第一工学部を生産工学部と改称	
1967(昭和42)	□短期大学部第一部、2年次を習志野校舎に移転	

1968(昭和43)		
1969(昭和44)	日大全共闘落城(2月18日)	アポロ11号月面着陸
1970(昭和45)	○工学部、大学院工学研究科修士課程を設置 ■生産工学部に大学院生産工学研究科修士課程を開設(桜建会第2代会長 加藤渉)	日本万国博覧会開幕、三島由紀夫割腹クーデター

会、そして発哺の研修会のおかげと感謝している。

大学4年の時、卒業設計のバース描きにはほとんど困った。幸い先輩たちが手伝ってくれた。提出の時は徹夜になったと思うが、私はむすび作りお茶汲み専門だった。最後には下宿の隣におられたW先生が手を加えてくれ、成績はお陰で優(?)がかった。今でも手伝ってくれた方々に会うと、当時を思い出しが盛り上がり酒の肴になっている。

話は元に戻るが、私は小学校5年から高校卒業まで九州の筑豊で過ごした。東京から疎開してきたよそ者で、身体が小さかったこともあり、気性の荒い地元の悪ガキたちに今という「いじめ」にあった。特に学校の行き帰りが恐く、回り道をして帰ったのを覚えている。負けん気の強い私は「どうしても護身の技をつけたい」と柔道を習った。理工学部にも柔道部はあったが、自分の好きな時に練習ができると思い講道館に入門した。期末試験が終わって、仲間から飲み誘われた時も我慢して講道館で練習した。忘れられない思い出がある。時間があつたので銭湯に入って昇段試合に臨んだ時、今まで負けたこともない相手に一本取られた。その後先輩に試合前の風呂は体力を消耗させるので厳禁、ま

たタバコも早く呼吸が切れるので吸わない方が良くと教えられた。タバコの方はその時のことが忘れられず、今でも吸っていない。大学4年の時、講道館二段の免状をもらった。卒業してからの話で恐縮だが、昭和34年の春、日本貿易振興会の仕事でマレーシアに行った。展示会開催の前夜祭で外国人相手に10人抜きを披露した。翌日の現地新聞一面に「日本人柔道マン、大男10人を投げる」と載った。関係者に「良いPRができた」と喜ばれた。学生時代に柔道を習っていたのが役に立った。その後柔道を通し知り合った方と、今でも親しくお付き合いしている。

もうひとつ大きな思い出は、小野新先生との出会いである。授業が終わるとよく先生の研究室に遊びに行った。研究室はいつも学生でいっぱいだった。下宿が同じ中央線沿線ということもあって、新宿の飲み屋によく連れて行ってもらった。ゲイバーにも初めて行った。その後私の人生の中で、大きなプラスになる方々との出会いもこの時から始まった。先生にはこれから先も、お元気で今まで同様お付き合い頂ければ幸いです。

短大時代に養われた、人生の「礎」

秋元和雄

理工学部建築学科 1961年卒業



都内の受験校に籍を置きながら模型飛行機とオートバイを愛してやまない若者にとって、大学受験はたいへん過酷なものであった。1年浪人して受けた大学は某国立大学の工業意匠科、日本大学理工学部建築学科であった。浪人の成果もなく1年目同様両大学とも失敗した。しかし捨てる神あれば拾う神ありの諺どおり、短期大学部建築科なら入学の門が開かれている旨の通知があり、藁をもつかむ気持ちで入学手続きをとった。時に昭和32年4月、劣等感のかたまりでの入学。

当時短大は今の生産工学部のある津田沼にあった。校舎は旧陸軍の兵舎を利用したもので、いたってお粗末な代物、憧れの大学とはほど遠い佇まいであった。市川市の自宅からは京成線を利用しての通学、本来なら世田谷(東京方面)に通うべきところ、千葉方面に



1964年ころ
工学部のキャンパスはコンクリートの校舎の他、兵舎も残っていた(写真提供: 斎藤賢吉)

向かう切なさは今でもよく思い出す。

入学してみると同じ境遇者の多いこと。皆2年後の学部編入を目指した、ここはいわば学部編入予備校で、大学入学の解放感はまったくなかった気がする。短大のカリキュラムは1年生から専門科目が多く、戸惑いとともに新鮮な授業もかなりあり、初めて取り組んだ設計製図は面白い学科であった。また図学の授業も楽しかった。先生は若さいっぱい近い近江先生、高校の先生とは一味も二味も違った講義、そのリベラルさにも心惹かれた。そして学生旅行の夜、海岸で聞いた師のおはこ「初恋」には何か甘い切ない思い出とともに、今でも鮮明にそのバリトンの美声が響く。

2年生となり設計製図の担当が、NHKの営繕から母校に戻られた小林美夫先生になる。コンクリート系の建物のコピーは、先生が設計された事務所の図面を使った。初めて目にする実施設計の図面、なんと美しく精緻な図面か……。今でもその上気した自分を思い出す。

工業高校からきた人たちの現実味ある図面、特にそのバースの旨さには舌を巻いた。それに比べ自分の設計図面はまるで幼稚、ここでも劣等感に苛まれた。しかし、小、中学校では絵と工作を得意だと自負してきた者にとって、何とか食らいついていくしかなかった。

そして銀行の設計課題の折、何人かの優秀作品の紹介があった。その中に自分の製図が張り出され小林美夫先生の優しい心に残る講評。このことが、その後設計に興味をもち劣等感を克服する原動力になった。

このころの世相は戦後も終わり近代日本構築の真っ直中、前川国男の東京文化会館、丹下健三の高知県庁舎、後世に残る建物が続々と登場していった。スバル360、パブリカなど、いわゆる国民車も登場、日本のモータリゼーションも芽吹きだした。そして昭和34年明仁皇太子殿下と正田美智子様とのご成婚、まことに華やかな世の中であった。

短大のキャンパスにも近代化の波が押し寄せ、近代的なRC造の校舎に変貌していった。その設計を小林先生が担当され、若色君(現建築学科教授)、片桐君(旧久米設計)、小林敬君(旧横浜市役所)、私らがお手伝いさせていただいたことは、一般の大学生活では味わえない貴重な経験とともに大きな財産となった。

そして学部への編入、やっと晴れやかな大学生活を送れることになった。憧れのお茶の水へ、竣工して間もない宮川先生設計の5号館に小林美夫研究室が置かれた。連日いりびたり、短大校舎、工科発哺山の家などの設計の手伝い、学会コンペへの参加などに青春を

ぶつけたことが、つい昨日のような気がする。

昭和36年3月、卒業と同時に清水建設に入社。設計部に配属されてからも研究室の延長のような気持ちで仕事ができる。そこにコンペがあれば当然のごとく参加し、入選も果たした。昭和55年12月「新建築会館設計競技」1席入選を機に独立して現在にいたっているが、今でも学生時代の友人や良い仲間とともに、楽しく仕事に励んでいる。このことは短大で劣等感を克服し、設計に大いなる興味を感じ得たことが原点にあるのであろう。私の人生の「礎」は短大時代に養われたといっても過言であるまい。

佐藤研に集まった 妙な4人組

渡辺邦夫

理工学部建築学科 1963年卒業



3年の終わりに卒業論文を書きはじめたために、全員がどこかの研究室に所属することになる。僕は、佐藤稔夫研究室を選んだ。日大は学生の数が多いためから人気のある研究室には数十人の学生が集ま



1965年
学園祭の後、同級生と一緒に石廊崎へ(写真提供: 池田武穂)



1962年
佐藤研の妙な4人(写真提供: 渡辺邦夫)



1963年 第2工学部。校門より北側の風景(写真提供: 矢代捷)

1971(昭和46)	〈桜建会名簿発刊〉	沖縄返還協定、環境庁発足、為替変動相場制採用
1972(昭和47)	○工学部に大学院工学研究科博士課程を設置 ■生産工学部に大学院生産工学研究科博士課程開設	
1973(昭和48)	◎理工学部、大学院理工学研究科修士課程・博士課程の建設工学専攻を建築学専攻と土木工学専攻に分離 ■生産工学部に生産工学研究所設置 〈桜建会報No.1 発刊〉	第一次石油危機(オイル・ショック)、狂乱物価・異常インフレ進行

1974(昭和49)		
1975(昭和50)		沖縄国際海洋博覧会開催、ベトナム戦争終結
1976(昭和51)	□日本大学短期大学部工科を日本大学短期大学部(習志野校舎)と名称変更	ロッキード事件、田中角栄首相逮捕

ってしまい、自分の勝手にならないので、当時もっとも人気のない研究室を選んだのだ。結局、この研究室にきたのは4人だけだった。

そのひとり若命は、どういうわけか知らないが佐藤先生と格別に親しく、研究室のことでか先生とお付き合いとかは彼が全部ひとりですべてやっていた。実に大らかな人柄で、細かいことに執着しない。その理由を聞いたら、自分の住んでる家の真正面に富士山がその雄大な姿を現している、毎日、それを眺めていて自分の性格が形成されたのだと、当然のことのように解説してくれた。

僕は研究室にときたま暇のときしか行かない。その代わり佐藤先生には、自分の一生を左右するほどのいろいろな方々を紹介してもらった。卒論のテーマを「塑性座屈」と決めていたから、当時、東大生研にいた田中尚先生、東工大で助手をやっていた平野道勝先生について随分勉強した。4年になる前には、すでに就職が決まっていた、というかこれも佐藤先生が強引で紹介してくれて決まったのだが、横山構造設計事務所に入りびたりであった。横山不学先生、渡辺籐松さん、加々美孝春さん、それに卒業してからは僕の師匠となる木村俊彦さん、僕にとって神様みたいな

存在である建築家の前川國男先生、鬼頭梓さん、早稲田の渡辺洋治さんなどなど超一流の方々から実に多くのことを学んだ。

甲斐さんは横浜の旅館の息子で心の優しい好青年である。彼の家に行き親父さんの洋酒を飲んだり、伊豆半島をサイクリングしたりと一緒に生活を楽しんでいたが、彼がどんなテーマで卒論をまとめたのかは未だに知らない。他の二人は、若命、石丸、とよび捨てにしていたが、甲斐だけはあまりにも人格的に僕よりできていた人物だから、甲斐さんと当時から「さん」づけでよんでいた。今でもそうである。

石丸は僕以上に滅茶苦茶な男で、佐藤研に居るのに「振動論」の勉強を始めたら、ほとんど1階上の田治見研に行っていて降りてこない。それに彼は工業高校の出身だから建築を勉強してきたキャリアが長く、僕たちよりはるかに建築を知っていて、僕も彼から構造力学を教えてもらっていた。だから次のステップに行くために「振動論」は不可欠だということを彼は知っていたのだろう。それなら田治見研に行けばいいのに、終始一貫して佐藤研に在籍していた人である。

いま紹介した人たちは、たまたま同じ研究室にいたからであり、特にこの4人が思考と

か行動を共にしていたわけではない。同級の多くの友人と付き合い、そこから得られる刺激が僕の活力の源であった。特に、当時は世界デザイン会議が開催された時期で、学生デザイン会議も併設され各大学が横断的に交流しており、僕の学生時代の最大の成果は、日大にとどまらず、明治、東大、日本女子大、早稲田、東工大などさまざまな大学の同級生と交流できたことである。このときの一人ひとりについて書いていたら30ページは超えてしまう。

出会いという場面

細田雅春

理工学部建築学科 1965年卒業



私の現在の仕事が建築設計であることは、大学で建築の勉強をしたことが最大の理由である。大学でのさまざまな人や場面の出会いが、今日の私をつくり上げているといっても過言ではない。建築の何かも解らずに、しかも突然の出来事に遭遇したかのように、すべてがまったく新しい環

境に身を置くことになったのが、大学というところだったからである。

最初の出会いは、それまでとは異なって、当然多くの新しい同僚、友だちである。志を異にするさまざまな友だちができた。しかしそれは、正しく言えば、建築との出会いではなかった。いまでも友人として長く付き合いはいるが、建築そのものの出会いとは言えない。

やはり、建築との強い出会いの始まりは、近江教授の近代建築史の授業であった。このことはいまでも、時にふれて話す機会があったが、改めて繰り返すとペプスナーの「モダンデザインの展開」であり、ギーティオンの「空間・時間・建築」であった。これらの本が、どれほど私を建築とは何か、建築とはいかなる世界にかかわっているものなのかを教えてくれたことか。衝撃というか、建築というものが白紙状態の学生には、すべてが新鮮で、そしてまた建築の崇高さともいべき偉大さを、知らされたのである。今でも原稿などの依頼があるとページを開くが、もはや古典的教科書にもなりつつある本である。

しかしなんとといっても最大の出会いは、小谷研究室に入ってからである。ヌーボーとした小谷教授の性格も私の性分にも合致してい

たのか、気に入っていた。現在では先生のライフワークともなっている劇場空間の専門家として、いつも演劇論やギリシャ劇場について、折に触れて話を聞かされていた。しかし私よりも感化され、なによりもインスパイヤーされたことは、劇場のそれではなく、建築の方法論的アプローチの重要性であった。当時（昭和35～39年頃）先生は建築学会をはじめとして、学外で東大の池辺陽先生らとの勉強会に積極的に参加され、建築システムデザインの方法的建築論を勉強しておられた。その影響下にあつて、私も先生の資料やお話にかかわるようになったのである。当時まだ建築が芸術と技術を統合するものとはいえ、感覚的、情緒的にそれをとらえてデザインする感覚でいた時期である。それを情緒や感覚ではなく、システムとして体系的にとらえ、かつすべてが数値化可能であるという世界を導入すべきであるというのが、そのときの先生からのお話であった。数学の位相幾何学（トポロジー）を導入したり、当時としては建築の新しい分野を示している感覚があつて、刺激的であり、たいへん魅力的であった。しかし当時本人は、そのことの重要性を十分に理解する余裕はなかったようだ。むしろ、感覚的なことまでの数値化など論外であると

いう気持ちをもっていた。むろん、そのことばだけをすべて真に受けていた私の方に問題があったのだが、しかしそのことは、社会に出た後の建築実務の世界では実に大切で、いかに重要なことか、噛みしめることの機会がいく度となくあつた。今でもたびたびある。

現代社会は、日本も世界も仕事上では、ボーダーがなくなり始めている中で、日本だけにしか通用しない世界が未だ蔓延している。規制緩和が叫ばれ、グローバリゼーションのいわれる中で、未だ日本という村の中の感覚の世界で、ものをいっている感がある。最近の企業の世界でも、ナレッジ・マネジメントの世界が常識になっているにもかかわらず、そのことが十分に浸透していない。システム化してマネジメントすることの重要性がわからないのである。無数の情報だけではなんの役に立たないのである。それを知識として体系化して、共有するシステムや移転可能なプログラムを構築できるか、それこそマネジメントする能力が問われる社会なのである。毎日がそうした世界での戦いである。



1977年
桜の季節の工学部構内。大串研究室の仲間と（写真提供：田中マリ子）

1969年ころ
学園紛争（『日本大学の90年』より）



1977年
卒業研究のため、静岡駅前商店街へサーベイに行く（写真提供：坂真美子）



1977 (昭和52)	△理工学部第一部に海洋建築工学科を設置 □短期大学部第二部を廃止
1978 (昭和53)	△海洋建築工学科、習志野校舎で授業開始
1979 (昭和54)	△大学院に海洋建築工学専攻を増設 □短期大学部建設科に土木コース、建築コースを開設

1980 (昭和55)		
1981 (昭和56)		住宅都市整備公団発足
1982 (昭和57)		
1983 (昭和58)	◎理工学部建築学科の第二部を廃止 〈桜建会名簿改訂〉	三宅島大噴火、田中角栄実刑判決

ハングリーなほど、 底力が発揮できる

木下靖子
理工学部建築学科 1965年卒業



40年も前になる学生時代のことが、つい最近の出来事のように思われるのは不思議な気もしますが、それだけ印象に残る数々の思い出があるからなのでしょう。

私は津田沼キャンパスで短大の2年間を過ごし、その後学部編入して駿河台キャンパスで後の2年間を過ごしました。この短大時代の2年間には、私にとって忘れることのできない数々の思い出が詰まっております。当時は学生数も今ほど多くなく、学生間のコミュニケーションも親密で、友人宅で期末テストの勉強をするようなこともよくありました。熱心で意欲満々の先生が大勢おられ、演習の時間には助手の先生が一人ひとりの机を廻ってきて、質問に丁寧に説明をしてくださったことが思い出されます。津田沼キャンパスには経営工学部と短大工学部がありました

が、校舎の前には広い芝生や木立とともにところどころベンチが置かれ、学生たちの語らいの風景がよく見られました。

私は当時、ESS（経営工学部と短大工学部の学生たちによる英会話クラブ）に属しておりましたが、このクラブが良き仲間たちのいるたいへん楽しいクラブで、授業の合間に部室をのぞくとたいへん誰かがいて、学校へ行く楽しみのひとつでもありました。この良き仲間たちとは今でも時々交流があり、学生時代の話に華が咲きます。年を重ねますと学生時代の良き友人たちは、かけがえのない大事な心の財産になります。振り返りますと、よく学びよく遊びと、学生生活を思う存分エンジョイしたように思います。毎月のようにだされる設計課題をなんとかこなし、こんなに忙しい学科は建築だけではないかとよく思いましたが、その合間をぬってクラブの友人たちと集い、またそれを楽しみにして課題に取り組んだものでした。提出後の一週間はそれは楽しい日々で、先輩後輩とのコミュニケーションを楽しみ、時には10人位でイギリス人講師の先生とともに新宿あたりに繰り出して、学生バーなところでカクテルを飲み、急に大人の仲間入りをしたような気分になったのを覚えております。先輩が見つめてきた外国

人講師による英会話レッスン、英語の弁論大会、他大学（東洋英和etc）の英会話クラブとの交流、3泊4日の土肥海岸での合宿などが懐かしく思い出されます。津田沼祭には外国の学生も招いて、大いに盛り上がったものです。短大建築科の同期にハーフの毛馬内美智子さんがおられ、クラブでは中心的存在で、彼女のいるところはどこでも笑いが絶えませんでした。美人の上にたいへんジョークの上手な方で、男子学生のあこがれの的でした。現在はシアトル在住ですが、日本を離れて初めて日本の良さがわかるようで、日本に来ると学生時代の友人や先生方にお目にかかるのを楽しみにしているようです。

学部編入しますと、女子学生は私を含め3人でしたが、あまり違和感はありませんでした。短大時代に身につけた多少の英語力のお陰で、木下茂徳先生を訪ねる欧米の大学の先生方（福祉関係）の案内役を務めさせていただくことが、何度かありました。今ほど海外の情報が得られる時代ではありませんでしたので、私にとっては、話題の内容がたいへん新鮮で興味深いものでした。

学部4年になりますと、もう少し福祉関係のことが知りたくなり、福祉を学べる国で就職できればと思うようになりました。就職先

をスウェーデンに決めましてからは、アルバイトの時間を授業に差しつかえない程度に増やし、自力で渡航費をつくることにしました。当時のアルバイトには、家庭教師や図面描き、夏休みのゼネコンでの資料整理などがありましたが、けっこう収入になりました。父親の事業がうまくいかず短大入学当初からアルバイトで授業料を捻出しておりましたので、さほど苦にもなりません。今思えばそのような気がいたします。

「孤高の師」との 出会い

藤井純子
理工学部建築学科 1966年卒業



学生時代はずいぶんと遠くなってしまったが、その記憶の扉を開けると、彫りの深い陰影のはっきりとした白黒の画像と向き合うことになる。それは時間が経っても古びて褪せることはない。否、この混迷した時代の今、昔日の師の姿が鮮明によみがえる。

学生時代の衝撃的な「出会い」は私の全身

に深く刷り込まれて、バックボーンとなっている。決して華やかな時代ではなかったが、活力に満ちていた。なんであれ吸収してしまう乾いた土のように吸収力が旺盛な時に、かけがえのない師との出会いがなければ、今の私は存在しない。

大学2年の夏、小林美夫先生が勉強のためにと送り込んでくださったのが、坪井善正建築設計事務所であった。先生のこの配慮は決して忘れられないご恩となった。事務所は赤坂見附の東急ホテルが建つ以前の、広大な更地の片隅にボツとあった。その頃はホテルニュージャパンも健在だったし、田町通り、みすじ通り周辺は政財界人の出入りする黒塚で囲われた木造の待合が並ぶ、粋な家並みの町であった。

まさに私の人生は、この初めて設計事務所を体験した20歳の夏に始動したといえる。夏休みの帰省を返上して通い続けた。その後も事務所に入出入りを許され、国内や海外の競技設計の経験もさせていただいた。その頃すでに誉れ高かった先輩の高宮さん（現在教授）がコンベに駆り出されて、彩色パースの手伝いをしていらしたのを覚えている。アトリエは、常に張り詰めた空気でおおわれていた。「建築」に対峙する坪井先生の息苦しくな

るほどの真摯な態度は、いつも変わることはなかった。この痛いほどの雰囲気を目の当たりにして、現実の社会のさまざまな制約とイメージとの激しい葛藤が、建築設計の生業であることを知らされた。当時はおぼろげではあったが、設計に携わることは設計者個人のあらゆる能力、人格が表出するものであること、また、個の確立が否応なしに問われる孤独な職業であることが理解できた。

情報の少ないこの時代、先生の蔵書には、学生の私にはもちろんのこと、欲しくても手の届かない和・洋の構造・意匠などの建築書、稀覯本が納めてあった。私にとっては初めての建築の古典との出会いであり、モダニズム建築家の独自の思想や個性が普遍的なかたちに昇華された作品を知る機会となった。事務所の休日に出かけては、これらの本に没入した。まだコピー機がないためかどらなかつたが、トレーシングペーパーを本に当ててなぞった図が脳裏に刻印されている。

建築のなんたるかを知らない素朴な女子学生だった私は、建築設計に取り組む先生の姿勢と、書棚の歴史的建築作品との出会いによって、目から鱗が剥け落ち、建築の魔力に魅せられ触発された。お金をなんとか工面して、本で知った新旧の建築や町を訪れる旅の習慣



1962年
津田沼校舎の運動場の前で
(写真提供：木下靖子)



1983年
生産工学部福島研究室の鉄骨実験風景
(『1984年卒業アルバム』より)

1984 (昭和59)		
1985 (昭和60)	◎理工学部建築学科に企画経営コースを設置	日本航空123便ジャンボ機、群馬県御巣鷹山に墜落(死者520人)
1986 (昭和61)		男女雇用機会均等法施行、H1ロケット打ち上げに成功

1987 (昭和62)		基準地価、東京都で平均85.7%上昇、東京で株価過去最大の暴落
1988 (昭和63)	△海洋建築工学科創設10周年 〈桜建会第3代会長 伊藤喜三郎〉	リクルート疑惑、総合土地対策要綱閣議決定、出稼ぎアジア人労働者増加
1989 (平成1)	日本大学創立100周年	昭和天皇(87歳)崩御、平成と改元、参院で与野党逆転、全労連結成、消費税実施

も、この時期に身についたものである。

爾來、先生とお会いしていない。一個の建築家として確立することを目途として新たな経験を求め、卒業後はアトリエ事務所とは違う、組織設計に就職することを選んだ。私は学生時代に幸運にも坪井善正先生に師事したことに感謝し、先生の常に思考と苦悩の厳しい生き様を標榜し、今もその精神の土壌を私なりに一途に耕し続けている。

あこがれのひとり暮らし

斎藤賢吉
工学部建築学科 1967年卒業



昭和22年、戦後の余燼さめやらない中、新潟から母親の背に負われ東京は神田佐久間町の実家に舞い戻った。疎開先とは食糧事情が異なりひもじさを絵に描いたような幼年時代を過ごした。当時の東京下町には、夏の夕方には夕涼みの縁台で将棋を指したり、向こう三軒両隣で夕饗のやりとりが当たり前の人情の濃い暮らしがあった。しかし、高校生にもなるとそんな環境に息苦

しさを感じ、大学生になったら家から抜けだし、どこかで自由なひとり暮らしすることにあこがれていた。事務職はいやだからと理系を志望し、絵が好きだったという単純な理由で建築を選んだが、はずせないのは東京を離れることだった。幸い日大理工はかすりもせず、郡山の工学部には何とか合格できた。

高校は一応都立の受験校だったけれど、類は友をよぶ仲間の劣等生は皆受験に失敗し、浪人再挑戦を予定の行動としている中で、ひとり決然と郡山に行くと言った。そうしたら怪訝な顔で「何でおまえ好きこんで」と信じられぬ様子。親からは浪人させたらますます怠けると見透かされ早々に郡山行きを許された時は、わがたくらみ成就と心中快哉を叫んだ。上野発仙台行き特急列車にひとり乗車したときは、さすがに心細く悲壮感さえも漂ったけれど、この先の制約のないひとり暮らしが心の支えでもあった。

3月下旬の郡山はまだ肌寒く、金山橋をわたって大学構内までは舗装もないガタガタ道、あたり一面は人家もなくとうもろこし畑だったような気がする。遠くに磐梯吾妻連峰が望める広大なキャンパスには1号館ほか数棟の教室とブロック造実験棟があるだけで、あとはアカシヤ並木と旧日本軍の木造兵舎が点在

し、その脇を阿武隈川が蕩々と流れていた。新築の北心寮に放り込まれたが、全国から集まった寮生との1年間の寮生活は、すべてが新鮮で目新しく光り輝いていた。麦飯にもすぐなれ、育ち盛りでいつも腹を空かせていたから、何よりの楽しみはたまにくる親元からの仕送りで、各地の名物が食べられた。人里離れた寮生活に飽きると郡山まで飲みに行き、帰りの上野行各駅列車に乗り遅れると寮までは下駄をならして歩いて帰った。今も続く友人は皆この寮仲間である。

教室へは目と鼻の距離で寄り道する暇もなく、春にはカッコーが鳴き環境は抜群であったが、あまりののどかさで授業中にはよく眠りもした。無事寮生活を終え、市内の下宿かアパートへ引っ越しすることになったが、繁華街近くは遊んでしまいそうと再び少し離れた開成山の宿屋に決めた。バス通学でいったん市内まで出て、日大行きに乗り換える面倒なルートであったが、開成山あたりは住宅も少なくおまけに女子短大も近くにあった。だからというわけではないが、襖1枚隣には渡澤先輩(建築学科専任講師)がおられ、なぜか毎日尺八を練習していた。35、6年前の郡山市は人口15万人といわれていたが、市域を端から端まで歩いていける人間的な都市規模で

あった。今とは異なり駅舎もなかなかの風情で、駅前ロータリーと繁華街、4号線を挟んで市役所や保健所、市民会館や図書館周辺、安積高校・短大の開成山周辺とゾーニングが明確でわかりやすかった。商店も市民も学生には寛大で親しみやすい街だった。

郡山でのひとり暮らしは、恋も失恋もし、生涯の伴侶や友を得、巡り歩いた街のそこかしこに忘れがたい思い出の残る青春の貴重な4年間であった。

さてわが国は今、未曾有の困難な時代を迎え、特に建築分野では全国体の建築ストックは量的に充足・飽和状態にあり、スクラップド・アンド・ビルドを前提とした研究・技術開発から新たな方向への転換が迫られている。建築家や建築技術者のための高等教育や、資格や継続教育についての国際相互承認にも対応が迫られ、これからは大学における研究や教育評価の結果が過酷な大学間競争の帰趨を決めるといっても過言ではない。後輩たちのためにも、われわれ卒業生のためにも、工学部ならではの特色ある研究・教育方針を確立され、ますますの発展を期待する次第である。

研究室を決めた、「信じよう」という一言

五十嵐徹
工学部建築学科 1973年卒業



私の入学は、学園紛争が集結した昭和44年でした。学園紛争とは、今でいう「団塊の世代」がさまざまな社会問題に対し結束し改革を進めたのですが、次第にエスカレートしロックアウト(学校閉鎖)や投石、果ては火炎瓶を使うなど、最後はメチャメチャな運動でした。入学前の私には、まるでお祭りのように見えた学生運動に参加できるワクワク(誤解のないようにいっておきますが私は断じて左・右系ではありません)した気持ちでしたが、東大の受験が取りやめとなり、穴場を狙ったはずの受験は軒並み高倍率となり、紆余曲折の末日本大学工学部へと入学することとなりました。入学当時、正門からの桜吹雪の中、今は建て替えられた本部棟の時計台が無惨にも焼けこげていたのを、鮮明に記憶しています。

以上のようなわけで期待に燃えていた学生

運動は跡形もなく消えており、学校側も再発防止のため入口に鉄条網を設けたり入校規制をしていたため、閉塞的なイメージの学生生活のスタートとなり、いよいよ大学の授業が始まり建築を志した私でしたが、何となく目標を失った1、2年はアルバイトに精をだしているうちに時間が過ぎていきました。

3年後半ともなり、皆がそろそろ就職云々の話をしているのを聞き、「こんなことやってて良いのかな?」と思い、一念発起しそれまで頼んでいた「代返」をやめ、まじめに授業に出るようになりました。というところが良いのですが、実は構造の授業で故倉田先生が出席の返事をしてズラかる私に目をつけ、授業の間中私の机の近くにおられたため、逃げられずにいたことが転機になったというのが真相です。先生は、演習問題を解く授業の中で「君は将来何になりたいのかな?」などの質問をされ、私が「デザイナーになろう」と答えると「そうだろうな。デザイナーは無駄な線をいっぱい描くからね」と問題解答が分からず困惑している私をご指導下さいました。今思うと他の学生が声をかけられても黙っていたのに対し、一言を多い私をからかっておられたのだと思いますが、今となっては良いきっかけをつくっていた



1985年
生産工学川村研究室のグアム旅行
(『1986年卒業アルバム』より)

1990(平成2)		第15回国勢調査(人口1億2361万人)、不動産融資の総量規制、ドイツ統一
1991(平成3)	□短期大学部建設科を建設学科と名称変更 ■生産工学部に居住空間デザインコース開設	バブル経済破綻、湾岸戦争、ソビエト社会主義共和国解体

1992(平成4)	◎理工学部の大学院理工学研究科博士前期課程に不動産科学専攻、医療・福祉工学専攻を増設 〈桜建会第4代会長 木下茂徳〉	国連平和維持活動(PKO)協力法案成立
1993(平成5)	○工学部に情報学科を開設	自民党結党以来初の野党に、小選挙区比例代表制導入、GNP 74年以來のマイナス成長

いたと感謝いたしております。

いよいよ4年生となり卒業最後の年となり、研究室を選ばなければならぬ時期となりました。実は3年の夏休みの直前に盲腸の手術をし、夏休み終了直前に家が火事となり宿題となっていた2つの課題を提出できなくなりました。この時の担当教授が故大内一雄先生で、私が「でき過ぎた話とお笑いになるでしょうが、実は盲腸と火事で課題ができませんでした」と診断書と近火見舞いの葉書を見せたところ、「信じよう」というひと言が研究室を決めることとなりました。卒業後恩師である大内先生に「あの時本当に信じてもらえたのでしょうか？」とお聞きしたところ「あんまり真剣だったので嘘かもしれないけど、信じるといわざるを得なかった。ところで本当だったの？」と笑いながらお話されたことが懐かしく思い出されます。

光陰矢のごとく月日は流れ、今から5、6年前、卒業後30年を経過した卒業生の集いがあり、懐かしい顔ぶれに会う機会がありました。かつて期待に燃え活き活きとした20代の青年の姿は片鱗もなく、只のハゲとデブの集団となっしまい、かつて心をときめかせた女性の変貌に驚愕すると共に、「私の青春時代」が過ぎ去ってしまったことを痛感した次

第です。今となっては、甘ずっぱい青春時代を過ごしたこと、友と語り、集い、飲んだくれたことなどが懐かしい思い出となっています。最後に、今は亡き倉田先生、大内先生のご冥福をお祈りいたします。

研修旅行で、黄金比を体験

松尾登志子
理工学部建築学科 1974年卒業



「若きエンジニアの歌」が毎日、習志野キャンパスに流れる中、徒歩15分の北習志野の下宿から通学していました。九州・福岡から上京、建築家を目指しての第一歩が短大・建設学科での学生生活でした。キャンパスのいちばん奥にある9号館での授業、砂塵が舞う坪井町での測量実習、課題提出日には広い習志野キャンパスを提出時間に間に合うよう全力で走ったことなどが懐かしく思い出されます。

1年生の時はクラス幹事として伊豆大島への親睦旅行を担当しました。同級生・先輩・先生方との1泊2日の船旅は、短大での生活

や建築論などを活発に話合いました。入学後の緊張をときほぐし、同じ目標に向かう多くの友に出会う良い機会となりました。放課後は「構造力学研究会」での活動・東京での展覧会見学など、2年間はとても短く感じました。

平成6年から6年間は、非常勤講師として短大・建設学科で先輩と勉学を共にする機会に恵まれました。20数年ぶりに訪れた母校は、船橋キャンパスと名称も新たになり、私の学生時代、黄砂が舞い上がる中登校した景色とは異なり、木々の緑が鮮やかで、研究棟・図書館・学生ホールなどが建設され、とてもすばらしいキャンパスに成長していました。授業の多くは当時と同じ9号館で行われていましたが、私が担当した設計の授業は理工・短大共通で使用する少人数の授業にも対応できる授業棟で行われており、キャンパスのさまざまなところで充実したものを感じました。

理工学部での学生生活は知人のいる東京・国立市からの通学でした。新しい友人にも恵まれ、学部編入後の授業にも数ヶ月で慣れ、放課後は日大先輩の紹介で原宿・表参道の建築事務所でのアルバイトに夢中でした。落ち着いた雰囲気か漂う街並みが随所にあり、同潤会青山アパートに代表されるすばらしい建築がたくさんある事務所周辺を、アルバイト

の行き帰りに散策するのがなよりの楽しみでした。当時の事務所は海外のプロジェクトも多く、日本人スタッフに加え多くの国から建築家が集い、英語・フランス語などが飛び交う中、日々新たな発見の連続でした。私は主にコンペに提出する模型の製作補助・書類の整理などを担当しましたが、当時の日大建築の第二外国語はドイツ語でしたので、フランス語の図面・書類などがまったくわからず、語学力の大切さを痛感しました。

4年生夏休みには大学の研修旅行に参加し、ポルトガル・スペイン・フランス等を訪れました。当時は、ガウディの建築を手軽に動画で見る機会などない時代でしたので、研修の合間に訪れた地中海の蒼さと共に、グエル公園やサクラダ・ファミリアを訪れた時の感動が昨日のこのように思い出されます。また、フランスでは、ル・コルビュジェのロンシャン礼拝堂等を訪ねました。礼拝堂内外のさまざまな場所で横たわってみたり、両手を広げてみたりと全身で黄金比のすばらしさを体感しました。

大学院では専門研究の他に、授業で訪れた横浜港のレンガ倉庫街が懐かしく思い出されます。関内から石川町にかけての古い街並みの都市機能再生を提案するという内容の授

業でした。私は福岡県北九州市門司区の出身ですので、明治から大正にかけて造られた港町横浜を象徴する税関・レンガ倉庫・貨物引込み線路などは、共通の景観を多くもつ門司港の再生計画との対比からも興味深く取り組みました。

新宿にあるギャラリー・タイセイはよく訪れる場所のひとつです。この夏の展示は「LE CORBUSIER LE MODULOR」でした。30年前の研修旅行に想いをはせながら、ル・コルビュジェの建築・絵画のすばらしさに感動し、建築家の卵たちといく度となく訪れました。

まさに「時代を先取り」した授業であった

矢野裕芳
生産工学部建築工学科 1974年卒業



私は、1970年から74年にかけて生産工学部の建築工学科に在籍した。授業は1年次が船橋キャンパス（現、理工学部船橋校舎）、2年次以降が習志野キャンパス（現、生産工学部津田沼校舎）で行われた。そのころ、あたりの街並みは、都心郊

外特有の公団住宅や戸建住宅があるのみで、それ以外には目立つ建物が特になかった。当時のわが国は、高度経済成長期を迎えており、都心では高層ビルが建ち始め、郊外では市街化が進行し始めていた。そのためか、大学にはそれら実務に詳しい個性的な先生方が多数おられ、興味ある授業や私の将来に影響を与えていく恩師に巡り合うことができた。

そのひとつは、風工学の授業であった。高層ビルの設計が風の力によって影響されながらデザインされていくことは今や周知であるが、高層建築が少なかった時代に、その理論を確立された先生の授業である。もともと建築設計に興味をもっていた私は、設計とは意匠設計であり、構造設計とは構造計算であると単純に考えていた。そのため、風工学も自分には無縁な科目だと考えていた。しかし最初の講義は、なんとマリリンモンローの映画で有名な、あのニューヨークの地下鉄の排気口でスカートを抑えるシーンから始まった。風が人や周辺環境に与える影響について淡々と説明されたのである。構造の面白さがわからなかった私にとって、これほどわかりやすい授業はなかった。構造デザインの重要性について意識し始めたのはこの時期であったと記憶している。



1995年
阪神淡路大地震の惨状
(写真提供：坪井善道)

1994 (平成6)	◎理工学部、大学院理工学研究科の不動産科学専攻、医療・福祉工学専攻に博士後期課程を増設	
1995 (平成7)		阪神・淡路大地震発生(死者6432名)、オウム真理教地下鉄サリン事件

1996 (平成8)	◎□△東葉高速線「船橋日大前駅」を開設 習志野校舎を船橋校舎に名称変更 〈校建会第5代会長 中村栄太郎〉 □日本大学短期大学部(習志野校舎)を日本大学短期大学部(船橋校舎)に名称変更	
1997 (平成9)		東京湾横断海底トンネル部分開通、地球温暖化防止京都会議、大型倒産続く

施工に関連する科目も印象に残る授業があった。建設会社出身のある先生は、一般的なビルのパラベットの高さが施工上で最低何cm必要なかを説明されるのに、建設業にはビールが不可欠という結論から講義された。なぜかといえば、ビルの防水立ち上がり部分の「入り隅」部分を入念に施工するには、ビール瓶の曲面が有効であり、そのためには最低50cm程度の立ち上がりが必要という。建設業は、地鎮祭などで必ず酒が登場するが、そのあとでビール瓶がこのように活用されているとは意外な発見であった。施工には創意工夫が必要であることを示唆する講義であった。

設計分野で強く影響を受けたのは、神谷宏治先生からご指導賜ったゼミナールと卒業設計・卒業研究である。神谷先生は国内外で活躍する著名建築家で、代々木の体育館や大阪万博の設計などを担当しているが、いったいどのような方法で、あのような個性あるダイナミックな建築が生まれてきたのかを知りたい。これは、当時の私にとって最大の関心事であった。これら授業では、主にご自身が担当された作品や海外の都市・建築について講義されていたが、単に建築のデザインだけでなく、海外建築家とのコラボレーションの実態や、建築デザインと建築技術との一体性などにつ

いても広く言及されていた。今思えば、それは、相当な建築知識を有していないと理解が困難な内容である。その当時、私がそれをどこまで分かっていたかは定かでないが、ただ、啞然として聞いていたことは間違いない。しかし、大学卒業後に国内外の建築設計の仕事をするようになって、当時の講義内容が極めて重要な意味をもっていたことに気づく場面を何度も経験した。今さらながらではあるが、当時のそれは、まさに「時代を先取り」した授業であったといわざるを得ない。

今会社では各種施設の企画や計画を担当しているが、ひとつの建築を実現するときのアプローチの仕方や、そのプロセスをようやく理解できるような年齢になってきた。しかし、一方では、私たちが次世代に残せるものは一体何か、それも大きな課題だと思っている。

私を育ててくれた日大の建築には、実に個性豊かな先生方や先輩が多い。それら個性が今後の建築界をさらに躍進させていくことを願ってやまない。

今になって、意味が明らかに

田中マリ子
工学部建築学科 1977年卒業



私の学生時代の始まりは、今から29年前。当時の工学部のイメージはとにかく男性的でした。黒い学生服を着た体育会系男子諸君はここかしこでオーッス、オーッスと声をかけあっている。しかし私は女子校出身だけれど、女性的であることをあまり好まない性格が多分に幸いし（女性的であった方が、実はもっと幸せだったらいいか）、工学部が居心地良好にて、勉強も部活も遊びも精一杯活動させていただいた。製図ではトレースでさえ1本引く線の意味が分からず、あちこち資料集めに時間を費やし、本題の提出物は遅々として結局徹夜。設計にいたっては、本当にこんなことができるのだろうか、実際の建物を見て回ってから描き始めるわけだから結局連続徹夜。そのようすは今も捨てきれずにしまっているいくつかの課題のケント紙に、深い側溝のような痕跡となって残っ

ている。それにしてもケント紙の溝は、エネルギーがないと掘れないものだ、最近ではつくづく当時の若さを羨ましく思う。

部活は中学、高校とやっていたテニス。そのまま自然な延長線で入部したのだけれど、いちばん最初に体育会の会長さんのもとへ、挨拶に連れて行かれた時のことは忘れられない。やはり黒の学生服を着た恐そうなお兄さん。体育会としての心構えを述べられた後に、頑張ってくださいと声をかけられた。そしてそのことばが励みとなって、準備運動である大嫌いな毎日のマラソンになんとか耐えられた。入った当時は、女子は私のみ。若干1名であったため先輩方が気を遣ってくださり、早くからストロークなどさせていただいて、女子部員も最高8名にまで増えた。

この部活の冬にはスキー合宿などがあって、地元出身の私は南育ちの大半の同級生より初めはうまく、でも次の年には、毎日ナイターにまで通う彼らに追い越された。その合宿中お世話になった東磐梯寮の方が、昼食にと用意してくれる大きなおにぎりや漬物を、雪上に座り込んで下界に広がる猪苗代湖を見ながらおいしくいただいた。その光景は、当時の寮がなくなってしまった今思い出すと本当に懐かしい。心温かな管理人さんご家族は、

今はどうしていらっしゃるのだろうか。そういえばこの冬の山でコンパをしていて、飲み過ぎた先輩はアルコール中毒となって…。私たちは彼を毛布でくるんで、積雪で車が入って来れない山道を、雪をかき分けかき分け下界まで運んだ記憶がある。

学部を卒業して、私は修士へ進むことを選択した。当時御指導くださった大串不二雄先生。私たちの学年が最初で最後の院生であったと亡くなられた後に知り、卒業後先生とお会いできるような機会を多くもつべきであったと、とても後悔した。先生は当時もそして今でも尊敬する方のおひとりであると思っている。当時は先生が御指導くださった日本人の文化や住生活について、あまり理解できずに研究を終えたけれど、この年代になって、その一つひとつの意味することがほんの少しのきっかけで明らかになってくる。本当に今頃になって感動することしばしば。そんな時には先生を思い出して、感謝して、もう少し設計活動頑張ろうかと思う。

当時の男くさい工学部の領内で、女子校出身のガチガチな私が、どうしてこうも有意義に学生生活を送れたかという理由を、きちんと自分にいい聞かせておきたい。それは、当時私を取り巻く友だちや先輩方、先生方、職

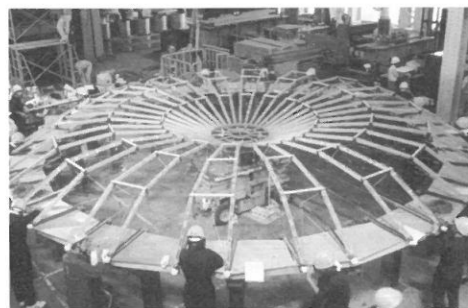
員の方々が、いつも紳士的な態度と親しみをもって接してくれたおかげである。だから嬉しかった。それは今でも変わらず、多くの学部出身の方々に助けられて仕事をし、生活している。その意味で、学生時代の思い出は「皆さんありがとう」なんである。

楽しかった授業は 即日設計

保坂真美子
生産工学部建築工学科 1978年卒業



私の専攻した建築学科は、当時はまだ女性には数えるほどにしかいなかったと思います。確か、1学年に4〜5名でした。高校時代は、文科系専攻だったせいも、建築についてほとんどなににも分からないままスタートしてしまいました。今思うと、笑ってしまいますが、建築を学んでいくための道具、たとえば、勾配定規、T定規、ホルダー、鳥口など（今では死語に近いかもしれませんが）さえ知らなかったのです。そんな建築へのアプローチでしたが、幸い友人にも先輩にも恵まれ、学生生活は順調に送ることが



1990年
理工学部大型実験棟。出雲もくもくドームの施工実験風景（写真提供：齋藤公男）



2000年
「くまもとアートポリス」のイベント展示に学生とともに参加する（写真提供：佐藤慎也）



2001年
千代田区の児童館で行った地域ボランティアの一風景（写真提供：佐藤直樹）

1998 (平成10)	△理工学部、海洋建築工学科創立20周年記念シンポジウム開催	
1999 (平成11)	■生産工学部に社会人大学院博士課程後期を開設	介護保険制度スタート

2000 (平成12)	◎理工学部創設 80周年 □短期大学部（船橋校舎）創設 50周年 〈桜建会第6代会長 平山善吉〉 △海洋建築工学科と韓国海洋大学校海洋建築空間学部との学術交流開始	皇太后逝去
2001 (平成13)	◎理工学部建築学科、JABEE（日本技術者教育認定機構）の試行審査を他校に先んじて受審 ○工学部に国際工学コース（FE対応コース）を設置 □短期大学部建設学科の土木・環境コースを廃止	小泉内閣発足、ニューヨーク・ワールドトレードセンターテロ攻撃で倒壊

できました。
 入学して、それまでの学校生活と大きく異なっていたことは、いろいろな地方出身の学友たちと知り合えたことです。それまでは地域社会の中だけの友人たちだけでしたから、遊びにしても食べ物にしても、比較的同じような文化体験を共有していました。出身地以外の友人ができたことは、私の人生に幅をもたせることができたと思っています。そしてそのことが社会へ出るための第1歩として、とてもよい経験になりました。

当時の教養学部は北習志野校舎でした。今でも覚えているのはドイツ語の授業です。クラスに女性がたったひとりだったせいか、毎回ドイツ語の小説を読むことになってしまいました。語学が苦手だったので、他の授業より辛くてたいへんでしたが、たいへんだったわりにドイツ語はほとんど忘れてしまいました。また、入学当時の学食の掛けうどんが確か1杯30円でした。とても安く驚いたものです。

設計製図の授業で記憶していることは、「設計は平面ではなく立体で考えろ」とよく聞きかされたことです。今でも、とてもすばらしい教えだったと思います。そして、もっとも建築に興味をもち、楽しかった授業は即日設

計の授業です。社会に出てからとても役立ちました。スキルアップにはとても効果がある授業だったと感じています。そして、いつの日か私も設計者として、社会で活躍できるのだと夢見ていました。

研究室は神谷研究室に所属しました。卒業研究のテーマは「都市空間特性調査及び実態分析に関する研究」で、私は静岡班に所属しました。研究の内容もさることながら静岡をサーベイしたのはとても楽しい思い出です。合宿をしながらの調査でしたので、仲間との連帯感も生まれました。

学生時代に世に出た建築で印象深かったのは、原邸(原広司74年)、住吉の長屋(安藤忠雄76年)、ワールドトレードセンター(ミノル・ヤマサキ76年)、ボンビドーセンター(レンゾ・ピアノ他77年)等々。残念ながら、去年ワールドトレードセンターは跡形もなく消滅してしまいました。卒業してから10年後に見たのが最後でした。建築は半永久的だと信じていたので、大変なショックでした。

またこの4年間に、世の中ではいろいろなことが起こっていました。入学の年には、日本経済は戦後初のマイナス成長を遂げ、そして、ベトナム戦争終結。ロッキード事件。日本赤軍日航機ハイジャック等々。まさに、お

おきな波(うねり)が時代を変えようと押し寄せていたのです。

最後に、お世辞にも真面目な学生生活とはいえませんが、有意義だったことは確かです。そして、その後の人生に大きな影響を与えてもらった4年間でした。

2002年

理工学部船橋校舎での1年生「デザイン基礎」の講評会(写真提供:佐藤直樹)



2002 (平成14)	<p>■生産工学部に建築・環境デザインコース、建築工学コース開設 <桜門建築会創立 80 周年> ■生産工学部創設 50 周年</p>
-------------	---

桜建会報
 発行人 平山善吉
 編集 桜門建築会広報委員会
 〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
 日本大学理工学部内

広報委員会
 委員長 坪井善道(生産工学部建築工学科)
 副委員長 小石川正男(短期大学部建設学科)
 委員 岡田 章(理工学部建築学科)
 木村靖彦(千葉県都市部建築指導課)

湯浅 昇(生産工学部建築工学科)
 近藤典夫(理工学部海洋建築工学科)
 杉田義一(GAギャラリー編集部)
 関口宏之(新建築社)
 田所辰之助(短期大学部建設学科)
 田畑博章(大林組)
 野内英治(工学部建築学科)
 西山麻夕美(フリー編集者)
 日比生寛史(日比生寛史建築計画研究所)
 村本勝彦(ペンシルベニア大学建築学部)

桜建会事務局

クラス会の開催、投稿、広告、会費、名簿など桜建会全般についての問い合わせ、住所変更は、事務局までご連絡ください。

理工学部5号館8階580号室
 TEL03-3259-0649、03-3292-3216 (FAX兼用)
 E-mail oken@arch.cst.nihon-u.ac.jp
 専任/江川美千子
 非常勤/星野久子
 業務時間/AM10:00~PM5:00(月~金)

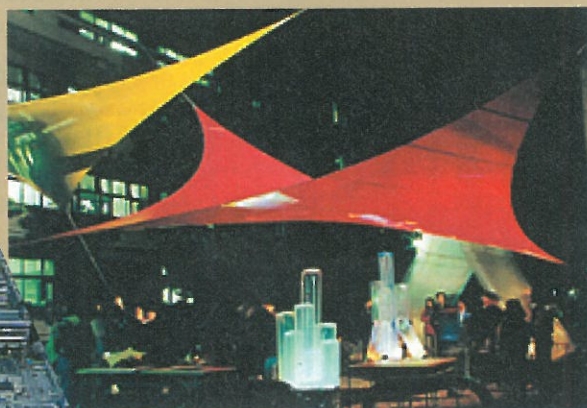
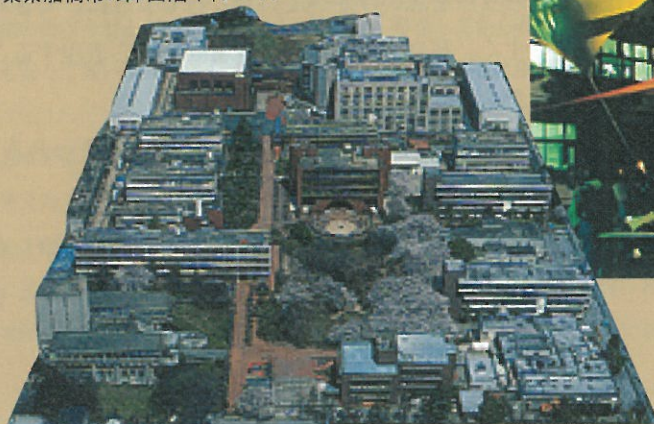
短期大学部建設学科

右・左／毎年8月に行われるオープンキャンパスの様子。
建設学科のコーナーでは、多数の図面や模型が展示され、
高校生や地域の人たちなどが、見学に訪れる



生産工学部建築工学科

右／1992年12月ヘニッケ客員教授
特別講義のメンブレン作成課題の作品展示
左／千葉県船橋市の津田沼キャンパス



理工学部海洋建築工学科

右／水辺環境との関わりに重点を置いた
設計演習のランドスケープの課題作品
左／基礎海洋学で行われる
測定機器を使った海洋観測の実習

